センの「ケイパビリティ・アプローチ」について

その定義は『人が自ら福祉を実現する自由度[1]』、また後藤は「諸財の有する特性を個々人の財（特性）利用能力・資源で返還する事によって達成される諸機能の選択可能集合[2]」とし、更に「個人の『福祉的自由』（Well-being freedom）を表すと解される」としている。

ここで言う諸機能とは、人間の幸せな生活を構成する諸機能『「適切な栄養を得ているか」「健康状態にあるか」「避けられる病気にかかっていないか」「早死にしていないか」「幸福であるか」「自尊心をもっているか」「社会生活に参加しているか」[3]』などである。

ケイパビリティ概念による貧困や不平等の計測は、社会政策策定上において、各人各様の出自、障碍の有無、貧富の差などの境遇の違いを補償できるように、平等な財活動の効果をもたらすための社会政策のベースのおかれるべき構成を採るとされている。「厚生」と言う人間の「幸せ感」を、年収と間での相関関係を想定し、その量の多寡によって、政策の効果や、社会の貧困（不幸せ度）を計測し、比較しようとする厚生経済学的な構成に対する、いわばアンチテーゼとしての、絶対呈基準としての「ケイパビリティ概念」が提示されている。貧困へのケイパビリティ・アプローチにおいては、天災等の飢餓の蔓延する社会であっても、その社会状態の評価において、絶対的貧困と相対的貧困の逆転現象のない評価を可能にする絶対的基準として想定されている。

１．ケイパビリティ概念の観念性・時間性・絶対性について

時間性：この概念規定性において、幸せを実現する自由度といった、時間軸を未来に向けた「潜在能力」と言う表現として、その構成要素である各「機能」が設定されている。そのためケイパビリティを構成する各「機能」を測定するために、具体的な指標の特定、その指標、社会調査項目の設定とその回答の評価において、どのような構成を採りうるのか、その特定の困難性が予測されるのではないだろうか？

ケイパビリティを構成する各機能について、項目の評価測定について、将来状態を含めて計測することのできる指標の構成は、貧困の測定、実証性を求める社会調査としての指標設定とその集計、評価において、また各機能間の境界領域の設定において、困難性が問われるのではないだろうか。

観念性：ケイパビリティを構成する各機能においては、「幸せな生活」という内実が、

1　塩野谷祐一/鈴村興太郎/後藤玲子編　『福祉の公共哲学』　P77　3行　東京大学出版会　2005年5月30日

2 後藤玲子　アマルティア・センの潜在能力アプローチと社会保障　Ｐ１
www.rengo-soken.or.jp/dio/No149/k_hokoku1.htm　0702/11

3 アマルティア・セン『不平等の再検討』P59　岩波書店　2000年12月

個人・社会によって多様な様相を呈する問題になるのではないだろうか。「厚生」概念は「所得額」との相関関係を採り、その具体的な状態をベースにして、現実過程を数量化して切り取ると言った方法論であろう。それに対してケイパビリティはその構成要素としての「各機能」を、どのような現実課程を、どう設定してゆくのかが問われよう。その時に各機能の互いの境界線について重なり合うことなく、独立的な具体的調査事項を設定し、その評価を進める手続きが問題になる構成ではないだろうか。

また自己の社会的な立場、位置の及ぼす心理社会的要因については（貧困測定において影響を及ぼすとされる)、社会内の位置関係の影響を比較衡量できる指標として設定するにあたり、生活問題と各機能の関係を整理し、それらを機能として統合する作業において、各機能の抽象性的な構成を、指標相互の独立性と重なり合いの明確化を果たしつつの設定が求められよう。

絶対性：絶対的貧困という、社会全体の食糧の過酷な枯渇、過酷な飢饉においては、集団内の上位の位置にも拘らず、生命危機をきたす場合があり得る、その事は歴史的事実であろう。相対的貧困と絶対的貧困の逆転現象は、社会という箍（たが）の中のルールにおいて食糧調達の行動が行われ続けている人類において、その社会的ルールの崩壊を齎し、あるいは上層階層であっても餓死に至る食料枯渇の可能性もあり得るところから、生物学的死に至る食料枯渇の閾値が存在し、集団全体を襲う飢饉をも現出し得るのが飢饉の現実過程と思われる。

この生物学的な限界を一定の基準値として設定するなど、貧困の測定においては、生命維持に係る物質的な必要量の捕捉に係る基準値をどう組み込むのかが問われるのではないだろうか。いわば比較する他者（生命維持可能な閾値）をどのラインとして、貧困の測定を進めるのか、一定の基準値（他者）との関係を問わざるを得ないのが、不平等問題であり、不平等を抱え持つ貧困問題であり、一定の閾値（比較する他者）を抱えざるを得ないのが、貧困測定・その評価軸ではないのだろうか？

特に「幸福であるか」「自尊心をもっているか」「社会生活に参加しているか」と言う機能について、個人の主観的な思い、受け止め方をどの軸により客観指標の値として切り取り得るのか、それが問われよう。その中で絶対的基準という構成が成立するためには、主観性を客観性で読み込む操作が問われるであろうが、相対的貧困（不平等問題）を構成する要因の複層性（社会心理的な問題、社会文化性、社会の階層構造）の中で、個人の経済活動の可能な幅は、各地の文化多様性の中でどう比較対照できるデータの構成、評価手法が問われるのでは無いだろうか。

２．財の配分問題とケイパビリティ概念

ケイパビリティ・アプローチについて、実際の適用の中では「センによる潜在能力の定式化は基本的に個人の潜在能力の記述に留まっていて、資源配分問題と個人間の潜在能力の分配問題とが論理的にどうかかわるのかと言う点が問われずじまいである[4]。」と指摘されている。

ケイパビリティの構成要素「ファンクション―機能」の定義は、自然と文化が重なり合う形の構成となっており、それは人間の生活は文化性が生活の全分野を覆いつくしている事の表現とも言えよう。しかしそれぞれ生活機能は何処までが最低必要量なのか、言い換えれば不平等測度における均等分割線、貧困測度における貧困線を特定せずに進める絶対的な量の測定という構成であり、自然的生物的な生存の為の必須条件、生命維持に必要な線を問題にせざるを得ない貧困問題において、餓死・凍死等の最悪事態への社会政策対応が、貧困研究の存在理由でもあろうところ、貧困線に変わる生物学的最低線、生命維持の為の必要量の問題は避けられないのではないだろうか。ケイパビリティ概念の構成は、貧困政策の中の「命の問題」が捨象され得るとも考えられるのではないだろうか。

3. 食糧調達の問題

そこでファンクショニングの間での重みづけと言った観点に繋がる問題は不可避な問題として、時代性や地域性など、各集団の文化内容により、幅のある内容になる「基本的ケイパビリティ」の構成において、各社会の文化、習俗の中で具体的な構成を採るファンクショニング（機能）間での食糧調達に関連する事項が問題になると思われる。「重要なものの中でも、相互にウェイト付けをしなければならない。[5]」とされている「重み付け」について、いわば社会の貧困の局限状況、飢饉において、生命維持が最優先であり、食糧獲得の為の権限の調査は必須とならざるを得ないであろう。

実務的な場面において、各社会、国家における基本的ケイパビリティの特定、その測定、評価の困難性が指摘され、政策への応用である国連の人間貧困指数の議論では、これまでの貧困へのアプローチと大きな違いは認められないとも指摘されている。

人間の自然生物的生存条件とこれを支える社会文化的な生存条件を重層的にとらえて一つの機能とする場合に、個人は現代社会のシステムの中を生きており、その上で社会心理的な側面が経済行動に影響を及ぼすところから、現実の財獲得活動等の効果を把握測定するにあたり、現実の社会内での属性、社会制度からの影響を勘案する技術が求められ、そ

---

[4]吉原直毅 「分配的正義の経済哲学：厚生主義から非厚生主義へ」 P35　2006 年 1 月
http://www.ier.hit-u.ac.jp/Common/publication/DP/DP472.pdf　07/07/07

[5] アマルティア・セン『不平等の再検討』P65　岩波書店　2000 年 12 月

れは様々な分野での比較する他者を要請する、複層的な事象ではないだろうか。

世界に共通的な貧困測定のための絶対的基準として指標の設定としては、人類の文化多様性において、財の配分問題と心理的側面といった総合的指標の設定が問われる貧困測定であろうから、各社会文化の中の階層構造を勘案する中で、比較する他者をどう設定するのか、この中に命の問題をどう組み込んで各ケイパビリティ（機能）を構成するのかが問われよう。その点がセンの各機能の構成、そのデータの読み込みにおいて問われてくるのではないだろうか？（20220715）